様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年　６月　５日現在

機関番号：13901
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2009～2011
課題番号：21520371
研究課題名（和文）
中国バレエ史研究：革命バレエの成立と終焉およびその継承まで
研究課題名（英文）
A Study on Classical Ballet History in China: as the Origin of Revolutionary Ballet
研究代表者
星野　幸代（　HOSHINO　YUKIYO　）
名古屋大学・国際言語文化研究科・准教授
研究者番号：00303587

研究成果の概要（和文）：
戦時中国におけるクラシックバレエないしモダンバレエの受容について、主要なダンサーにおける西洋舞踊の受容、公演の実態とその目的、メディアの評価を追った結果、淪陥区と国統区別々に実証する必要があり、植民政権に利用された舞踊と、抗日に貢献した舞踊とが交錯していることが分かった。総じて、戦前中国における舞踊は映画・演劇・音楽・漫画といった文化的ネットワークを持っていただけでなく、実際に日本軍ないし抗日組織と結びつき、強い政治的目的を持っていた。だからこそ、後の革命バレエの萌芽となりえたのである。

研究成果の概要（英文）：
This study focuses on the influence of classical ballet and modern dance in China during the Sino-Japanese War. By researching important performance reported in the newspapers at that time and reading reviews of these performances, we find many differences between dance in Japanese-occupied areas and that in communist-controlled areas. Therefore, the differences between their aims need to be studied separately according to each supporters' organizations. Moreover, dancers in the 1940s in China on many occasions cooperated with filmmakers, actors, musicians, and cartoonist in either demonstrating against or supporting Japan. These performers often had clear political assertions. Therefore, it can be said that dance in the 1940s in China is the origin of the so-called revolutionary ballet.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	700,000	210,000	910,000
2010 年度	500,000	150,000	650,000
2011 年度	500,000	150,000	650,000
総　計	1,700,000	510,000	2,210,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：各国文学・文学論
キーワード：中国文学、舞踊史、バレエ、身体、メディア

様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

１．研究開始当初の背景

従来の中国芸術史における中国バレエ

中国芸術史において、“中国舞踏史”研究は今日少なくない（王克芬等編『中国近現代当代舞踏発展史』人民音樂出版社など）。しかしそれらの多くは民族舞踊であり、近代以降、西洋の舞踊の受容に関する研究、あるいは“中国バレエ史”としてまとまった著作はなく、舞踏史の「芭蕾（バレエ）」を扱った節を継ぎ合わせるしかない。

上海文化史における中国バレエ

留学する資力のあった清国官僚の子女など特権的な例を除けば、二十世紀初頭、最初に中国にバレエを持ち込んだのは白系ロシア人およびユダヤ人たちである。彼らはハルピン、上海等にバレエ学校や教室を開き、そこで少数の中国人も学んだ。上海では白系ロシア人を中心とするバレエ団、上海バレエ・リュスが１９３０年代より盛んに活動し、戦時中は唯一の日本人団員小牧正英を中心とし、上演を続けた。

これらの、上海を中心とする外国人のバレエ普及活動についてはある程度研究があるのに対し、それが同時代また戦後の中国バレエにいかなる影響を与えたかについては、研究がほぼない状況であった。

日中交流史としての舞踊

創作バレエ『白毛女』は、中国の演劇＼歌劇『白毛女』に感銘を受けて松山樹子が創作し（松山バレエ団 1955 年初演）、中国に逆輸入された（山田晃三『白毛女在日本』新華書店など）。この事実に関しては、日本側、中国側の証言、客観的資料ともに少なくない。しかし、これまで日中の国交がない間の特殊な草の根日中バレエ交流として取り上げられる傾向があり、前後の時代との連続性が検討されてこなかった。

２．研究の目的

（一）１９４０年代戦時下上海で活動したバレエ団、上海バレエ・リュスについて、その所属ダンサー小牧正英（1911-2006）の活躍を再評価するとともに、彼を通じた上海バレエ・リュスと日本戦時文化工作との結びつきを明らかにする。

（二）１９４０年代の中国舞踊界について、舞踊公演の目的や宣伝という面で協力しあっていた政界、教育界、演劇、美術界の人物などの資料を調査し、抗日芸術のつなぐ文化人ネットワークを再構成する。

（三）中国へクラシック・バレエおよびモダン・ダンスを輸入した重要人物であるダンサー戴愛蓮（1916－2006）に注目し、彼女を通じていかにクラシック・バレエのメソード、ドイツのモダンダンスが受容され、伝達されたか影響関係を裏付ける。

（四）戦時中国におけるバレエの身体プロパガンダ性と、文化大革命時の革命バレエおよび今日の中国バレエとの連続性を考察する。

（五）戦後の中国バレエ教育について、従来ソ連の影響が強調されてきたのに対し、ロシア帝政時代の舞踊の影響、また英国バレエの影響の可能性を探る。

３．研究の方法

資料閲覧：上海図書館、台湾大学図書館、国立国会図書館（東京）、東京大学文学部図書館、愛知大学図書館等で、『大陸新報』、『新華日報』等、日中戦争時の中国語、日本語新聞を閲覧し、報道記事等を収集した。

その他資料収集：主として中国保衛同盟の機関紙 *China Defense League Report* 1939-40、ダンサーSilan Chen Layda, Marie Rambert の自伝、ジャーナリスト Percy Chen、Jack Chen、

Israel Epstein 等の手記を入手した。

研究者との意見交換：

World History Association 2011 Beijing Conference, Beijing Capital University（2011 年 7 月 8 日）にて研究発表し、質疑を行った。並びに日本国内の上海における芸術を研究対象とする研究者たちと、年２回前後の非公式な研究会で意見交換を行った。

４．研究成果

＊「２. 研究の目的」と対応させて記述する。

（一）戦後の小牧正英への評価は以下のように集約される。すなわち、小牧の参加した上海バレエ・リュスが本家のディアギレフ [Sergei Diaghilev]・バレエ・リュスを正統に引き継ぐか否かは疑問である、しかしその時代の日本バレエ界にとって、小牧および上海バレエ・リュスは意義ある存在だというものである。

戦時 1940－45 年、日本政府の新聞であった『大陸新報』は上海バレエ・リュスおよび小牧正英を、次のように報じてきた。

40年 上海バレエ・リュスは、国際的都市上海で日本の文化レベルを誇示するための「身体というメディア」集団として注目された。

41年 「敵国」ダンサーが収容所に送られる。上海バレエ・リュスにまだ日本人ダンサーがいるとは知られていなかったため、その存在はほぼ無視された。

42年 上海バレエ・リュスの日本人ダンサー小牧正英を戦時日本の文化工作宣伝手段として利用し、国際的芸術を解する日本人を演出した。小牧正英の舞踊メディアとなった身体は、に機能していた。

一方、戦後日本の小牧正英の功績は、小牧バレエ団を創設し、上海バレエ・リュスの上演レパートリーを次々と本邦初演し、ディアギレフ・バレエ・リュスの作品生命をつなぐ役割を果たした点にある。小牧正英の「メディア化された身体」は、上海バレエ・リュスの舞踊を日本で育てたダンサーたちに伝え、それは継承され続けている。

（二）１９４０年代の中国では、淪陥区（日本占領区）、国統区（国民党勢力区）、解放区（共産党勢力区）それぞれ舞踊家のスポンサーと活動目的が異なり、鑑賞者も異なる。例えば、日本人舞踊家による日本軍慰問公演の鑑賞者の中には、中国人の要人もいた。彼らは日本留学経験者が多かったと証言されている。また崔承喜のように、朝鮮民族としての誇りを隠しつつ日本軍を慰問した舞踊家の記録もある。これらの舞踊もまた、中国大陸で中国人に鑑賞されたことは確かである。さらに、欧米人を中心とする抗日援助組織 China Defense League の後援を受けた、抗日舞踊の流れもある。すなわち、1940 年代中国舞踊研究の最終目的は、日本人舞踊家と、中国・朝鮮の舞踊家と別々に考察した上で総合的に考える必要があることが明らかになって来た。本研究では、解放区で保衛中国同盟というスポンサーの下、抗日支援を目的に踊った華僑・戴愛蓮の活動を中心に考察を進めた。

さらに、戴愛蓮の舞踊活動は、欧州華僑の抗日運動の一部であったとともに、中国国内の抗日活動の中で漫画、演劇、音楽、青少年教育などとも結びついていった。

（三）戴愛蓮がトリニダード・トバゴ及び英国で受けた舞踊教育を検討した結果、彼女はダルクローズ（Émile Jaques-Dalcroze）のリトミックとチェケッティ（Enrico Cecchetti）・メソードという今日なお権威のある舞踊の基礎を学んだと言える。さらに戴は、舞踊の振り付けを記録する方法として、ルドルフ・ラ

バン(Rudolf von Laban)の考案したラバノーテーションを、ラバンの在英舞踊教育センターにて習得した。この記譜法は、戦前・戦後にかけて、戴愛蓮が中国各民族舞踊を採集する際に生かされた。

パフォーマーとしての戴愛蓮の功績は、ドイツ表現舞踊の流れを汲むモダンダンスを、上海、香港といった特殊な国際都市で大半が外国人の観客相手に披露するのでなく、国統区の中国人へダイレクトに発信したことにある。

（四）戦時下の香港、重慶などを中心に戴愛蓮が公演して回った舞踊の振り付けを考察すると、西欧のダルクローズおよびラバンの舞踊の方法論を受け継ぎつつ、抗日プロパガンダを表現するものであった。ダルクローズ、ラバンの舞踊にはカルト性があることが指摘されており、それらの一部は創始者の意図とは離れ、ナチスに取り込まれていったという歴史的事実がある。当時の戴愛蓮の舞踊は被抑圧側の抵抗のパフォーマンスであったが、建国後、戴が中国国立バレエ団の責任者に抜擢されてから文化大革命期にかけて、それは人民共和国の権力のカルト的なパフォーマンスとして支配者側に利用される一方、支配者側に与しないダンサー、振付家などは排斥されたことが明らかになった。

（五）戦後の中国バレエ教育は、中国の政治社会的背景から、1950-60 年代にソ連の国立舞踊学校から派遣されたバレエ教師たちの影響が強調されてきた。しかし、実は英国の国立バレエ学校で正当なクラシック・バレエを修めたバレエ教師が、中国の国立バレエ団員の基礎教育に大きな役割を果たしたことが分かった。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計６件）

１　星野幸代「抗日運動における舞踊家・戴愛蓮――陳友仁、宋慶齢との関わりを中心に」『東方学』第 124 集　東方学会　査読あり（掲載決定）2012 年７月刊行予定

２　星野幸代「日本統治下文化工作における上海バレエ・リュスと小牧正英――『大陸新報』報道を追って」『JunCture 超域的日本文化研究 02』名古屋大学大学院文学研究科附属日本近現代文化研究センター　査読あり 2011 年３月　120-131 頁

３　「新・中国学のヒント（12）中国バレエ史」『東方』364 号　東方書店　　査読なし 2011 年６月

〔学会発表〕（計３件）

１ Yukiyo Hoshino. The Origin of Classical Ballet in China through the Narrative of Cross-cultural Influence. World History Association 2011 Beijing Conference, Beijing Capital University, 2011/7/8

６．研究組織
(1)研究代表者
星野　幸代（HOSHINO　YUKIYO）名古屋大学・国際言語文化研究科・准教授

研究者番号：21520371

(2)研究分担者　該当なし

(3)連携研究者　該当なし